

一般常識動画③

1969－1990

関連サイト

大阪万博

<http://www.youtube.com/watch?v=5yVvBW4p7z8&feature=related>

環境庁

<https://www.youtube.com/watch?v=UxbnXaG30bs>

ニクソンと毛沢東

http://www.youtube.com/watch?v=_DFJjWNTY3I

石油危機

<https://www.youtube.com/watch?v=N13mUN6m7XI>

石油危機（笑）

<https://www.youtube.com/watch?v=t3IUq-9Z0IQ>

改革開放への胎動

<http://www.youtube.com/watch?v=yQANaEcqRPE&feature=related>

思いやり予算

<http://www.youtube.com/watch?v=Ulo7BibLcLM>

佐藤栄作・田中角栄

<http://www.youtube.com/watch?v=EoeDB8SONX8>

ラムサール条約

<https://www.youtube.com/watch?v=4Ew7hem8ecs>

生物多様性条約

<https://www.youtube.com/watch?v=UshafNXRQpc>

ワシントン条約

<https://www.youtube.com/watch?v=f0l8yGZiUBw>

双子の赤字

<http://www.youtube.com/watch?v=N2wA>

[OpKDnGs](#)

東京サミット・プラザ合意他

<http://www.youtube.com/watch?v=N2wA>

[OpKDnGs](#)

バブル経済

<https://www.youtube.com/watch?v=aSRQsITFPak>

チェルノブイリ

<https://www.youtube.com/watch?v=W2CwwJXEkPA>

ベルリンの壁

http://www.youtube.com/watch?v=k8hzrGyvKGA&feature=youtube_gdata

冷戦終結

<https://www.youtube.com/watch?v=o7vOoabFmZI>

高田の独り言

アジア国家発展のプロセスモデル

日本の1950年代から60年代にかけての動きは、後のアジア諸国の発展プロセスに大きな影響を与えました。そのプロセスとは①経済発展をとげ、巨大な建築や世界最速の交通機関を作ること。②オリンピックを開くこと。③仕上げは万博をひらくこと。という順序です。

五輪開催の都市は首都で、万博はその次に重要視される都市で行います。日本は50年代から経済発展をとげ、その勢いで64年に東京五輪を開き、OECDに加盟しました。アジアにおける五輪は単なるスポーツの祭典ではなく、ある程度経済力を備えた自国が世界にデビューする、いわば国威発揚の晴れ舞台なのです。そしてそれに合わせて新幹線のような最先端のテクノロジーを導入したり、黒部ダムや高層ビルのような巨大な建造物を造ったりするのです。先進国化した仕上げに70年には大阪万博によって海外からの観光客に半年間日本の先進技術を見てもらうという感じです。

大阪万博がおわったころ韓国は漢江の奇跡と称される経済発展を遂げ、アジアNIESの一角を担います。そして88年にソウルオリンピックを開催し、それに合わせて国内では85年に東洋最高のビル、63ビルを建てたりしました。93年には現在首都機能の一部を担う大田で科学万博が行われ、会場内をリニアモーターカーが走りました。

ソウルオリンピックが行われていた80年代から急速な経済発展を続けた中国は2008年に北京オリンピック、2010年には上海万博、そしてそれに合わせて国中で超高層ビルが建ち並び、リニアモーターカーや新幹線が開通したのは周知の通りです。

このようなプロセスを最初にやったのが日本でした。60年代、80年代、2000年代と20年周期ぐらいで行われるアジアオリンピックですが、次回は十数年後、どこで行われるのでしょうか。そしてその時にはこの「日本式」がまだ採用されているのでしょうか。

公害と妖怪

60年代後半に次々と出された公害訴訟は、経済発展の裏に隠れた環境問題の存在を国民に知らしめました。経済発展を推進する日本政府が国民の安全を犠牲にして企業の利益を優先したという方針は、沖縄の人たちの安全を無視して米軍に協力してきた政策と共通するものがあります。その結果、経済発展を最重視し、それまで人々をはぐくんできた野山や海、川などを粗末にしてきたことに対する反省を、日本人は強いられたのです。

ここまでは他国でも同様でしょうが、興味深いことに日本人が一連の公害を科学的な現象としてながらも、深層心理では神道的に「山の神、海の神が怒っている」と受け取り、公害を「妖怪」と見なしていたことです。川を汚すと河童が怒って災いをもたらすという発想は、我々の心の片隅に今もあるのです。



↑河童の出る？という淵（岩手県遠野）

例えば水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」などにもよく公害に起因する妖怪が出てきます。人間が捨てたごみやが、化学変化を起こしてできたアカナメとい

う妖怪や、文明を嫌い、都市を農地に変え、マンモスフラワーなる原始の植物を植える山男、開発されようとする敷地に現れる田んぼの守り神「泥田坊」など、妖怪に公害を許容する社会を断罪させています。

当時の男の子たちが大好きだったウルトラマンシリーズの怪獣など、それぞれ公害によって生まれた怪獣だらけです。宇宙から地球の生態を調べに来たメイツ星人なるものは地球の環境の悪さに倒れてしまいました。海洋汚染のために肥大化したゲスラも人間たちを襲います。子供のころ見ていた頃はただのヒーローの脇役にすぎなかった怪獣たちが、環境問題を訴えていたのです。そしていま、ウルトラマンは中国の子供たちのヒーローであることも見逃せません。

さらに怪獣映画ゴジラシリーズで 71 年にヒットした「ゴジラ対ヘドラ」にでてくるヘドラとは、ぼろぞうきんのような体に赤い眼が不気味な怪獣です。実はこれは宇宙から飛来した鉱物が、公害によるヘドロと合体してできた怪獣であり、大都市を襲うという筋書きなのです。

これらは全て日本中が公害によって汚染されていたことに対する反省として、環境庁ができた 71 年から国連人間環境会議が行われた 72 年にかけて集中して制作されています。

80 年代になると宮崎駿率いるスタジオジブリが、同じように環境を破壊した人間にメッセージを送るために「風の谷のナウシカ」の王蟲や「もののけ姫」のシシ神などとして描いてみせました。これらの世界観に共通するのは、公害は悪ではなく、自分たち自身の行いを省みさせる存在なのです。

そして 2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が起こり、地が震え、波に襲われまし

た。巨大な妖怪に直面したのです。さらには 65 年に茨城県東海村で運転開始した原発という、自らが作りだした巨大な怪獣の仲間が暴れ出し、いまだウルトラマンも鬼太郎もゴジラが来ない状態です。今のような状態だからこそゴジラやウルトラマン、鬼太郎、宮崎アニメなどをもう一度みる必要があるのではないのでしょうか。

沖縄返還

5 月 15 日は沖縄返還記念日です。私がこの日の存在を知ったのは、97 年に沖縄に滞在したときです。沖縄で驚いたことは数々あるが、そのうちの 하나가基地の周りに住む人たちの英語力です。コザ（沖縄市）のアイスクリームショップで、あるおばあさんが常連客と思える米兵に世間話をしていたのですが、その英語はネイティブスピーカーとは異なるとはいえ、よどみなく流暢に話しているではありませんか。

また、米軍のヘリが学校のキャンパスに落ちた時、怒鳴りこんできたおじいさんの英語も怒りをにじませてはいるけれど同じタイプの流暢な英語でした。基地の周りに住んで米兵と付き合いざるを得ない人たちにとっての英語とは、支配・被支配の関係を意識しながらも相手に合わせて応酬すべき、生きるためのツールなのです。これは本土の英会話スクールや留学で学ぶものとは異なります。今まで接してきた中では、満州や韓国、台湾などで出会った老人たちと日本語で話した時の彼らの流暢さに似ているのです。

64 年に成立した佐藤栄作内閣にとって、悲願ともいえるべきものが沖縄の「祖国復帰」でした。45 年 3 月から 6 月にかけての沖縄戦で、沖縄本島は壊滅的なまでに破壊されました。ウチナンチュー

(沖縄の人たち)にとって、「終戦記念日」は8月15日ではなく、それよりも2カ月弱早い6月23日なのです。実際、沖縄の新聞では8月16日の新聞のトップに終戦記念日のことはあまり大きく取り扱われないようです。

その後27年間米軍の支配を受けてきた沖縄は、朝鮮戦争やベトナム戦争の後方支援基地としての役割を果たさざるを得ませんでした。基地の街コザでは、今でもその当時の面影が残っています。60年代当時の沖縄は米国の公民権運動の影響を受け、沖縄でも黒人用のバーと白人用のバーは分かれる傾向にあったといい、また米兵と沖縄の人たちとのトラブルは、基本的にほとんどが米兵に有利になる、いわば治外法権状態におかれていたとのこと。このようななか、70年にはコザ市で米軍車両と民間人との衝突事件から、米軍車両を焼き討ちにする、いわゆる「コザ暴動」が起きました。戦場から一時帰還している、昨日までベトナムで人殺しをさせられていた荒くれ者たちを相手にせねばならないウチナンチューにとって、故郷そのものが被占領地だったのです。そのような状態を27年間経て、ようやく日本に復帰できたのです。



↑夜な夜な米兵が集う金武町新開地

しかし復帰すべき「祖国」は沖縄戦においてウチナンチューをスパイ扱いし、独立をうたうサンフランシスコ平和条約では沖縄の本土からの切り離しを容認し、同時に結んだ日米安保条約では沖

縄への米軍駐留を認めてきた、「ひどい親」であるとの見方もあるので県民感情は一筋縄ではいかず、現に沖縄を訪問した佐藤栄作も県民の反対が激しく結局米軍基地内に逃げ込んだほどです。親米一辺倒の佐藤政権であるから、沖縄返還の見返りに、米軍が継続して沖縄を使用できるようにし、米軍から日本への返還引き継ぎ経費も日本側がもつことになりました。さらに、非核三原則とはいいいながらも沖縄に核兵器が持ち込まれていたことが2009年に発覚しました。

東日本大震災で宮城に赴いた沖縄駐留の米軍部隊の兵士が、「歓迎されないのではないかと心配だったが、来てよかった。」とインタビューで答えていました。この発言から分かるように、沖縄にいる米軍を心から歓迎するウチナンチューはほとんどいないという事実を、米兵自身よく分かっているのでしょう。沖縄はすでに返還されたけれど、基地の返還にはさらなる時間がかかりそうです。

北京と深圳

北京の天安門広場の真ん中に毛主席記念堂があります。ここには毛沢東の遺体が保存されていて、それを拝観するために人々が長い列をなしているのですが、列からはみ出すと警備員に注意されます。献花用の花を売る人たちが時々やってきて声をかける以外は、おしゃべりするのとはばかれるのか、みな比較的静かにしています。数十分待っている間、周囲を見渡すと、毛沢東が1949年10月1日に中華人民共和国の成立を宣言した天安門が目の前に見えるようです。そして76年に周恩来が亡くなった後の清明節に人民が自発的に集い、翌日江青率いる四人組が彼らを反革命分子として逮捕し、憤懣やるかたない人民が四人組追

放を叫んだのもこの広場です。天安門広場は正に 20 世紀の中国の動きを見つめてきたところなのです。

そんなことを思いながらようやく記念堂内にはいると、何度も写真や映像、そして中国のお札の肖像でお目にかかる毛沢東が横たわっています。誰のものであれ、遺体を保存しているのを見るのも初めてで、じっくりみながら、この人物の人生と中国人民が歩んできた道でも思いおこしたいところですが、立ち止まることができないのです。神妙な顔の人、泣きそうな人、ニタニタしている人、表情は様々ですが、これらの黙々と歩く人の波に流されて遺体の安置室からでました。

すると次の部屋では毛沢東グッズを大声で売っているではありませんか。商売繁盛大繁盛とばかりに関連グッズを売り、先程まで神妙な顔つきだった参観者も普通の中国人ショッピング客の表情を取り戻します。文化大革命から改革開放に向けて一気に変貌した中国そのものを、故意に表現しているのか、何も考えずにやっているのか、戸惑うほどです。この我が目を疑わんばかりの変化こそ、70 年代末から 90 年代にかけての中国人が身をもって体験してきたことなのでしょう。



↑ 深圳の高層ビル群。70 年代までは農村

別の機会に香港から深圳に行ったときのこと。深圳博物館という、この街の

歴史的な変遷が見られる巨大な博物館があるので、6 時間ほどかけて隅々まで見ました。この博物館の最も主張したいことは、客家などの住んでいた小さな漁村が、香港との貿易で多少栄えたけれど、日本軍に占領され、「解放」後も引き続き侘びしい漁村だったけれど、改革開放政策によって急速に発展した。それを決定した鄧小平同志を顕彰せよ、とのことです。これだけ書くと、何が面白いのかと思われるかもしれないけれど、改革開放に至るまでの展示物が他に類をみないほど豊富多彩なのです。最後の展示室に鄧小平が両手を広げてみなを呼び寄せる壁画があるのが、一つの長い長い物語を見せられてきたかのようでもあります。

私がこの街に初めて足を踏み入れたのは 92 年のこと。当時、中国では最も進んだ豊かな町とのことでしたが、香港から見ると薄汚れてみすぼらしい街に過ぎませんでした。今や香港のような生活感を感じさせない、未来的で無機質な人工都市となりました。この大變貌を遂げさせた張本人はやはり鄧小平なのです。二つの南北両極端な街を見て、ようやくあの時代が追体験できたような気がしました。

冷戦終結とノストラダムス

80 年代を通して、「ノストラダムスの大予言」というテレビ特番が大流行しました。その番組が放映された翌日は、いかにも真実かのように「1999 年に地球が滅亡する。ノストラダムスは第二次世界大戦なども予言した。今は冷戦で米ソが核兵器をもっているから、核戦争が一度勃発すると全面化して地球がなくなる。」とクラスのだれかがまことしやかに話していました。半信半疑でしたが、

テレビで大の大人が深刻な顔をして地球滅亡を力説するので、また、NHKスペシャルなどでも米ソの核について特集をしているので、自分は1999年に28歳で死ぬに違いないと思うようになりました。

高校になるとソ連にゴルバチョフが出てきてペレストロイカを始め、INF全廃条約などをやり始めました。核戦争が食い止められそうな予感もありましたが、なぜか勉強に身が入らず、その理由を「どうせ28歳までしか生きられないのだから、勉強していい大学に行っても意味がない。」と冷戦のせいにして受験勉強から逃避していたのです。

そして89年、私が大学受験のときにベルリンの壁が崩壊したとき、東ベルリンの市民が西ベルリンとの間の壁をハンマーでぶち破るシーンをテレビで見ながら、「もしかしたら28歳以上まで生きられるかも・・・」となんとなく思い始めました。そして12月にマルタ会議で東西冷戦が終結したときには、「ああ、俺は30代まで生きられる！」と確信してほっとしたとともに、受験勉強をノストラダムスと冷戦にかこつけて、ろくな大学を受験しなかったことを後悔し始めました。

今思うと滑稽極まりない話です。もっと大人になって知識があれば、あるいはもっと子供で知識がなければ違ったのかもしれませんが、昭和40年代に生まれ、冷戦末期に少年時代をすごした私にとってはかなり現実味をもっていたのです。

そんな私ももう四十代。これはこれでまた別の悩みのタネですが・・・